

ロマンシュ語スルシルヴァン方言における 再帰構文の特異性について

坂口 友弥

SAKAGUCHI Tomoya

1. はじめに

1.1.

ロマンシュ語はレト・ロマンス語群の一言語である。レト・ロマンス語群に属する他の言語として、イタリア北東部のスロベニア、オーストリアと国境を接するフリウリ地方で話されているフリウリ Friuri 語、北イタリアのドロミテ Dolomite 山脈周辺地域で話されているラディン Ladin 語¹⁾が挙げられる。

ロマンシュ語は主にスイス南東に位置するグラウビュンデン Graubünden 州で話されている。ロマンシュ語を最も得意とする人々の合計²⁾は 24,016 人である (国勢調査, 2000)。これは、スイスの総人口³⁾の 0.3%にあたる。ロマンシュ語の話者数は大変少ないため、スイス政府がロマンシュ語を保護するために、様々な政策⁴⁾を行っている。(c.f. Gross, 2004, Stich, 2009)

ロマンシュ語には 5 つの方言が存在する。ロマンシュ語を最も得意とする人々の方言別の割合は次の通りである。スルシルヴァン Sursilvan 方言 13,879 人、スットシルヴァン Sutsilvan 方言 571 人、スルミラン Surmiran 方言 2,085 人、ヴァラーデル Vallader 方言 5,138 人、ピューテール Puter 方言 2,343 人である。この数はロマンシュ語を最も得意とする人々の数であり、実際の日常生活では、多くの人々がドイツ語を第一言語として使用しているのが現状である。スイス政府はロマンシュ語を保護するという名目で、Rumantsch Grischun⁵⁾ (ルマンチュ・グリジュン⁶⁾) という標準語を推奨している。しかしながら、この政策は必ずしもロマンシュ語を保護するための有効な政策とは言えない。ロマンシュ語を後世に伝えることができるという功の部分と、ロマンシュ語の方言差が損なわれること⁷⁾に拍車をかけてしまうという罪の二面性がある。今回の研究では、ロマンシュ語の方言データを分析することにより、ロマンシュ語の地域方言、特にスルシルヴァン方言の文法的特性を後世に伝え、ロマンス語研究の分野において少しでも貢献できれば幸いである。

1.2.

本調査は、現地においてアンケート調査の手法で行なった。本研究の焦点は話しことばであるため、従来の文献研究ではなく、本章3節で詳述する現象についてアンケート調査の手法を用いた。実施期間は2011年の1月下旬から3月下旬までの約二ヶ月間、実施場所はトゥイエツチ Tujetsch 地方のルエーラス Rueras⁸⁾という僅か人口200人の村である。この村は、主要都市であるチューリッヒから電車で南西に2時間ほど下った場所に位置する。このような事情により、ルエーラスの人々はロマンシュ語スルシルヴァン方言のみでなく、ドイツ語も日常的に話す。家族または近所の人々同士で話す際にはロマンシュ語スルシルヴァン方言を用いて、仕事で話す際にはドイツ語のみを用いる。したがって、ロマンシュ語スルシルヴァン方言の母語話者であっても、一日の中でロマンシュ語スルシルヴァン方言よりもドイツ語を多く話すことになる。さらに興味深いことに、多くの子供はその親に比べて、ロマンシュ語スルシルヴァン方言をドイツ語ほど流暢に話せない。このような状況から、家族の団らんの場において、親がロマンシュ語スルシルヴァン方言で問いかけても、子どもはドイツ語で応えるという場面が幾度となく見られた。このように、ロマンシュ語スルシルヴァン方言の地位が相対的に弱化傾向にあることが具体的に見てとれた。本研究は、この消滅の危機にある言語の話しことばに焦点を当てたものである。

1.3.

本節では、ロマンシュ語スルシルヴァン方言における再帰構造の特異性について概観する。この特異性をロマンシュ語と、同語群であるロマンス諸語に属し多くの共通の特徴をもつフランス語及びイタリア語と対照して見ていく。

一般的に、ロマンス諸語において再帰文を表す際には、動詞に再帰マーカ⁹⁾が先立つ形で表される。これはロマンシュ語のスルシルヴァン方言においても同様である。以下、イタリア語(1)、フランス語(2)、ロマンシュ語スルシルヴァン方言(3)の再帰文を例示する。(1)、(2)、(3)の全ての文はすべて「私は手を洗った。」という意味である。

(1) イタリア語

(Io)¹⁰⁾ *Mi* lavo le mani.

(私) RM 洗う 定冠詞 手

(2) フランス語

Je	me	lave	les	mains.
私	RM	洗う	定冠詞	手

(3) ロマンシュ語スルシルヴァン方言

Jeu	selavel ¹¹⁾	ils	mauns.
私	RM/洗う	定冠詞	手

(1)、(2)、(3)の文全てに RM が見られ、(1) イタリア語では *mi* が、(2) フランス語では *me* が、(3) ロマンシュ語スルシルヴァン方言では *se* が用いられる。通常、動詞が表す動作主¹²⁾の行為が動作主自身に及ぼすことを明示するために、再帰マーカ―が用いられる。つまり、ここでは動作主が「洗う」という行為を行い、その行為が動作主自身に影響を及ぼすのである。この (1)、(2)、(3)の文章の場合、動作主の行為が動作主の体の一部である手に向けられている。

しかしながら、ロマンシュ語スルシルヴァン方言において、再帰マーカ―を欠く形をとるが (1)、(2)、(3)の文と同様の意味を表す構造が観察される。これはインフォーマント¹³⁾に対する聞き込みによって明らかになった。一人のあるインフォーマントが、「私は手を洗ったという意味の文章を表す際に、通常再帰マーカ―を使わないで表す。」というコメントを残した。これは、ロマンシュ語スルシルヴァン方言において「私は手を洗った。」という意味を、再帰マーカ―を欠く形でも表すことができるということを意味する。つまり、再帰マーカ―を伴う (3)の構文に加え、以下 (4)の構文が存在するのである。

(4) ロマンシュ語スルシルヴァン方言

Jeu	lavel	ils	mauns.
私	洗う	定冠詞	手

(4)の文は再帰マーカ―*se*を欠いているため、被動作主が曖昧になるはずである。つまり、動作主が動作主自身の手を洗うのか、自分の手ではなく他人の手を洗うのか、という曖昧性を生み出してしまうのである。したがって、他のロマンス語であるフランス語 (5)及びイタリア語 (6)の両方の文章において、誰の手を洗うかが明示されていない曖昧な文章となる。

(5) フランス語

*Je	lave	les	mains.
私	洗う	定冠詞	手

(6) フランス語

*(Io)	lavo	le	mani.
(私)	洗う	定冠詞	手

ロマンシュ語スルシルヴァン方言 (4) は容認されるのに対して、フランス語 (5) 及び (6) は容認されない。(4) について、別のロマンシュ語スルシルヴァン方言の母語話者に確認すると、(4) のような再帰マーカーのない文章は、(3) の再帰マーカーのある文と同様の意味で理解し、コンテキストがない場合であっても、他者の手ではなく自身の手を洗うという解釈をするという回答を得た。

ロマンシュ語スルシルヴァン方言の再帰マーカーの省略の現象について先行研究は存在しない。加えて、ロマンシュ語スルシルヴァン方言の網羅的な記述のある Spescha (1989) にも、本現象についての記述は見当たらないため、アンケートの手法によって独自に調査を進めた。

2. アンケート調査前

2.1.

1.3.で述べたように、本研究のテーマに直接関連する文献は存在しない。加えて、本現象は書きことばにもあるが、話しことばほど頻度は多く見られない。したがって、本研究は現地スイスのグラウビュンデン州に行き、フィールドワークの手法で行った。加えて、フィールドワーク後、メーリングリストであるポスタ・ルマンチャ *Posta Rumantscha*¹⁴⁾ を使用して、アンケートを配布しデータの不足を補った。このメーリングリストはロマンシュ語を母語とする人々が集まり形成されているもので、合計 600 人の会員が登録している。現地の調査と事後のアンケート調査によって、計 18 件の有効なアンケート¹⁵⁾ を収集した。

アンケート調査を行なった 18 人のインフォーマントの全てがドイツ語との二言語併用話者であり、多くの人々がイタリア語、フランス語など複数の言語を流暢に話す。年齢の構成グループは、10 代が 1 人、20 代が 3 人、30 代が 4 人、40 代が 3 人、50 代が 3 人、60 代が 1 人、

70代が2人である。職業は、学校の教師、心理学者、サラリーマン、大学生、芸術家、大工、エンジニア、ジャーナリストと多岐にわたる。

2.2.

アンケート調査は各設問について、頻度別に1から4までの選択肢を設定して、インフォーマントがその頻度から一つを選択する形式で行った。インフォーマントには、全く用いない場合は1、時々用いる場合は2、頻繁に用いる場合は3、いつも用いる場合には4にマークをしてもらった。本研究で用いたアンケートの6題の設問を以下に列挙する。

グループ A

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. Jeu lavel. | 1---2---3---4 |
| 2. Jeu selavel. | 1---2---3---4 |

グループ B

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 3. Jeu lavel ils mauns. | 1---2---3---4 |
| 4. Jeu selavel ils mauns. | 1---2---3---4 |

グループ C

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 5. Jeu lavel mes mauns. | 1---2---3---4 |
| 6. Jeu selavel mes mauns. | 1---2---3---4 |

アンケートは、1と2で構成するグループA、3と4で構成するグループB、5と6で構成するグループCの三つのグループによって構成されている。各グループの前半である奇数番号の1、3、5は再帰マーカを持つ設問であり、後半である偶数番号の2、4、6は再帰マーカを持たない設問である。グループAは「私は（自分の）体を洗う。」という意味の文章であり、グループBは「私は（自分の）手を洗う」という意味の文章であり、グループCはグループBと同じく「私は（自分の）手を洗う」という意味の文章である。グループBとグループCの違いは、グループBが定冠詞であるilsを、グループCが所有代名詞であるmesが用いられているということである。

2.3.

本節では、グループごとに仮説を述べる。グループ A において、再帰マーカ―を持つ文のみが容認されるという結果になるのではないかと考える。その理由として、動詞の動作主のみが示されて、被動作主が示されないことは考えにくいためである。したがって、グループ A の設問 1 は容認されず、設問 2 のみが容認されると予測される。

グループ B において、再帰マーカ―を持つ文と再帰マーカ―を持たない文のどちらも容認されるが、再帰マーカ―を持つ文の容認度が再帰マーカ―を持たない文よりも高いという結果になると考えられる。その理由として、定冠詞があれば再帰マーカ―の有無に関わらず、自分の手を洗うという推測が可能であるためである。

グループ C において、グループ A やグループ B より仮説を立てるのが難しい。なぜなら、「自分の手を洗う」のような意味を表現する際には、ロマンス諸語において再帰マーカ―を通常伴うが、ロマンス諸語以外の言語では再帰マーカ―を用いることなく所有代名詞¹⁶⁾で表すことは珍しくないからである。再帰マーカ―を伴わず所有代名詞のみを持つ文が容認されると仮定すると、再帰マーカ―を持つ文は容認されないのではないかと予測される。これは再帰マーカ―と所有代名詞が重複しているため、二つの内どちらかが余剰となるためである。もし仮に若干の話者がこの重複を認めるのであれば、ロマンス諸語スルシルヴァン方言における再帰マーカ―の再帰行為の表示の機能が、失われているまたは失われつつあると考えられる。

3. アンケート調査後

3.1.

アンケート調査の結果を以下にまとめた。

	再帰マーカ―有	再帰マーカ―無
グループ A	100%	77.8%
グループ B	38.9%	94.4%
グループ C	27.8%	83.3%

表 1 再帰マーカ―の有無に関する容認度

アンケート調査の結果、容認度は様々であるが、全ての文章において容認できるという結果となった。したがって、表 1 には容認の割合を示した。表 1 は有効人数 18 人に対して算出されたものである。 $\{容認できると回答した数\} \div \{インフォーマントの合計有効数\} \times 100$ を行い、小数点第二位以下を切り捨て算出した割合である。

3.2.

グループ A では、再帰マーカを伴う文の容認度が 100 パーセント、再帰マーカを伴わない文の容認度が 78.8 パーセントとなった。したがって、再帰マーカを伴う文の容認度が再帰マーカを伴わない文の容認度を上回った。驚くべきことに、再帰マーカがなくとも容認されるという結果となった。再帰マーカがなくとも、動作主の行為は第三者に影響を及ぼすという解釈にならず、再帰の意味である「自身」に影響を及ぼすと解釈されるのが大変興味深い。ここでは、インフォーマントの推測により再帰の目的語を補っていると考えられる。

グループ B では、再帰マーカを伴う文の容認度が 38.9 パーセント、再帰マーカを伴わない文の容認度が 94.4% となった。したがって、再帰マーカを伴う文の容認度が再帰マーカを伴わない文の容認度を下回った。このことから、インフォーマントは再帰マーカが余剰であると考えているようである。

グループ C では、再帰マーカを伴う文の容認度が 27.8 パーセント、再帰マーカを伴わない文の容認度が 83.3 パーセントとなった。したがって、再帰マーカを伴う文の容認度が再帰マーカを伴わない文の容認度を下回った。この若干数のインフォーマントにとって、再帰マーカと所有代名詞が重複可能であることから、再帰マーカは機能していないと考えることができる。

4. まとめ

本研究のアンケート調査の結果、ロマンス語スルシルヴァン方言の再帰構文の特異性について主に三点のことが分かった。

一点目は、再帰マーカを伴わない文であっても、話者によって動詞の動作主が及ぼす行為は再帰的に自身に帰ってくると解釈し、動詞の動作主と被動作主が同一であるとしていることである。この解釈によって、目的語のない文であっても、その不足を埋めることができるのではないかと考えられる。体の一部である手 *ils mauns* のみが文に表れても、話者の解釈によって自身への再帰的な行為であると解釈されるのである。

二点目は、再帰的な動作を示す際に再帰マーカのみでなく、所有代名詞と身体部位という組み合わせによって表すことができるということである。これは、他のロマンス諸語には見られない。このことから、ロマンシュ語スルシルヴァン方言において、再帰マーカ存在は必然ではなく、再帰的な動作を表す場合にはヴァリエーションが認められるということになる。

三点目は、再帰マーカの機能の弱¹⁷⁾の可能性である。弱¹⁷⁾現象と考えられる特に顕著な点は、再帰マーカと所有代名詞が重複していても容認可能であるということである。再帰マーカと所有代名詞の重複する文の容認度が所有代名詞のみを持つ文よりも低くなるが、若干名のインフォーマントは容認できると回答した。このことから、いくつかの話者は再帰マーカが重要な機能を持っていないと考えていると推測される。

したがって、話者の解釈による被動作主の補填、所有代名詞による再帰構文の代用、再帰マーカの弱¹⁷⁾の可能性、以上三点が本研究から導き出されるロマンシュ語スルシルヴァン方言の再帰構文に見られる特異性である。

5. 展望

ここでは、今後の研究の展望¹⁸⁾を述べたい。今後、主に三点のことに留意して研究を進めていきたい。

第一に、今回の研究では時間の制約の理由から、動詞 *laver*「洗う」のみに絞って研究を進めた。今後の研究では、他の動詞についてもアンケート調査を行いたいと考えている。例えば、2.1.で定めたグループ A から C まで当てはめることができることを選択基準に、身体動詞 *setagliar*「切る」、*sebarschar*「火傷する」、*s'alzar*「起きる」、*serumper*「骨折する」などの動詞を用いてアンケート調査を行うことを考えている。

次に、発話の状況を踏まえたアンケートを作成することである。今回のアンケートでは、発話状況を除外した短文形式のみで行われた。次回のアンケートを作成する際には、すでに書かれた文を部分的に引用することを考えている。具体的には、ロマンシュ語スルシルヴァン方言で書かれている地方紙 *La Quotidiana*¹⁹⁾を使用する。

最後に、再帰マーカの省略がいつ頃から行われているのかを古い文献などをあたることによって確認したい。具体的には、Strebel (2005) で用いられた参考資料²⁰⁾を中心に調べていきたいと考えている。

注記

- 1) スイス・ロマンシュ語に存在するラディン Ladin 方言（ピュテール Puter 方言、ヴァラーデル Vallader 方言）とは異なる。
- 2) 家庭または仕事で最もロマンシュ語を使う人々の統計もある。これによると、スルシルヴァン Sursilvan 方言 17,897 人、スットシルヴァン Sutsilvan 方言 1,111 人、スルミラン Surmiran 方言 3,038 人、ヴァラーデル Vallader 方言 6,448 人、ピュテール Puter 方言 5,497 人であり、合計 33,991 人である。
- 3) スイスの総人口を 7,288,010 人として（国勢調査、2000）、小数点第二位以下を切り捨て算出した割合である。
- 4) 政府が行っている言語政策の一つとして、連邦国憲法及び州の自治法における言語の地位向上政策が挙げられる。現在、連邦国憲法下において国語の地位が、州の自治法において公用語の地位が与えられている。以下に、1999 年に新憲法をもって記載された第 4 条の国語条項と第 60 条の第 1 項の公用語条項を記す。

Art. 4 National languages

The National Languages are German, French, Italian, and Romansh.

Art. 70-1 Languages

The official languages of the Confederation shall be German, French and Italian. Romansh shall also be an official language of the Confederation when communicating with persons who speak Romansh.

- 5) In 1982, Heinrich Schmid, a German-speaking scholar at the University of Zurich, devised a new orthographic Romansh koine called *Rumanisch Grischun*. (Haiman and Benicà, 1992: 15)
- 6) 「グリジュン」はロマンシュ語において「グラウビュンデン州」をさし、グラウビュンデン州で話されている標準的なロマンシュ語という意味を込めて名付けられた。
- 7) This purely written language has been accorded some official recognition as the language of government regulations, but is not intended to supplant the spoken dialects. (ibid., 1992: 15)
標準語は書きことばのみの統一を意図したものであって、話しことばを脅かすものではないとしているが、地域住民はこの標準語が彼らの方言を脅かしていると感じているのが現状である。
- 8) 西に電車で 20 分ほど行けば、特にドイツ人観光客に人気のあるスキーリゾート地であるアンデルマツがある。
- 9) 文献により、「再帰代名詞」と呼ばれる場合がある。しかしながら、ここでは用語の統一のため「再帰マーカー」とする。文例 (1) から (6) ではスペースの都合上、再帰マーカーを RM とする。
- 10) 通常、イタリア語では主語が省略されるが、統一する便宜上括弧づけで主語を明示した。
- 11) 本方言の再帰マーカーは、人称や数によるパラダイムが存在しないため、全ての人称及び数において、*se* のみを用いる。加えて、動詞の接頭辞として語彙化しているため、分かち書きをせず示す。
- 12) The term *Agent* is defined as the entity that performs the activity or brings about a change of state. (Blake, 1994: 69)
- 13) プライバシー保護の観点から実名を公表しない。
- 14) メーリングリストの URL は以下のとおりである。 <http://posta.giuru.ch/>
- 15) およそ 30 人のインフォーマントから回答が得られたが全ての設問に答えていないもの、または一つの問いについて二つ以上回答しているものは無効とした。
- 16) 英語は通例 *I wash my hands*. のように所有代名詞を用いて再帰的な動作を示す。
- 17) 再帰マーカーの弱化について Strebel (2005) を参照されたい。他動詞と自動詞の対立によって分析を試みている。
- 18) 第 50 回の大会発表後の質疑応答において多くの指摘を頂いたことに感謝を述べたい。
- 19) 本誌には 1997 年から現在までのアーカイブが存在する。スルシルヴァン方言のみではなく、他の四方言によって書かれたアーカイブも存在する。詳しくは、以下の URL を参照されたい。 <http://suedostschweiz.ch/>
- 20) ロマンシュ語スルシルヴァン方言の聖書や民話のリストが記されている。

参考文献

- Bowern, Claire (2008) *Linguistic Fieldwork: A Practical Guide*. Palgrave Macmillian. Hants.
- Geniusiene, Emma (1987) *The Typology of Reflexives. Empirical Approaches to Language Typology*. Mouton de Gruyter. Berlin.
- Gross, Manfred (2004) *Romansch: Facts and Figures*. Lia Rumantscha. Chur.
- Haiman John and Benincà Paola (1992) *The Rhaeto-Romance Languages*. Routledge. London.
- Spescha, Arnold (1989) *Grammatica Sursilvana*. Casa editura per mieds d'instrucziun. Chur.
- Stebel, Barbara (2005) *Il Riflessivo in Soprasilvano: Indagine di Morfosintassi Sincronica e Diacronica*. Romanisches Seminar der Universität Zürich.
- Tesnière, Lucien (1959) *Eléments de syntaxe structurale*. C. Klincksieck.
- Stich, Dominique (2009) *Parlons Romanche: la quatrième langue officielle de la Suisse*. L'Harmattan. Paris.
- Wagner Robert Léon and Pinchon Jacqueline. (1962) *Grammaire du Français classique et moderne*. Hachette. Paris.